

# 三省堂版準拠

## 精選 国語総合

【改訂版】

# 学習課題ノート



ご採用  
見本  
ダイジェスト  
版

# 精選 国語総合〔改訂版〕学習課題ノート

## 目次

※ダイジェスト版には、★の教材を収録していません

### 現代文編

#### 一 随想

ぐうぜん、うたがう、読書のススメ  
「待つ」と「うごと」

川上未映子  
鷺田清一

#### 二 小説 (一)

##### ★ゴール

水の東西

芥川龍之介  
三崎亜記

#### 三 評論 (一)

言語は色眼鏡である

山崎正和  
野元菊雄

##### ★自然をめぐる合意の設計

旅上

関礼子  
萩原朔太郎

サーカス

中原中也

I was born

吉野弘

崖

石垣りん

#### 五 小説 (二)

清兵衛と瓢箪

志賀直哉

#### 六 評論 (二)

情報と身体

村上春樹

「もの」の科学から「こと」の科学へ

池田清彦

#### 七 短歌・俳句

その子二十——短歌十六首  
いくたびも——俳句十六句

与謝野晶子ほか  
正岡子規ほか

#### 八 小説 (三)

なめとこ山の熊

宮沢賢治

#### 九 評論 (三)

なぜ私たちは労働するのか

内田樹

命は誰のものなのか

柳澤桂子

### 古文編

#### 一 古文入門

児のそら寝 (宇治拾遺物語)  
検非違使忠明 (今昔物語集)

##### ★絵仏師良秀 (宇治拾遺物語)

#### 二 物語

★竹取物語 (かぐや姫の生い立ち／かぐや姫の成長)  
伊勢物語 (芥川／東下り／筒井筒)  
徒然草 (つれづれなるままに／  
ある人、弓射ることを習ふに／  
奥山に、猫またといふものありて／  
丹波に出雲といふ所あり／  
神無月のころ／花は盛りに) 兼好法師

#### 三 随筆

万葉集・古今和歌集・新古今和歌集  
★土佐日記 (門出／忘れ貝／帰京)  
平家物語 (祇園精舎／木曾の最期)  
奥の細道 (旅立ち／白河／立石寺) 松尾芭蕉

#### 四 和歌

漢文の世界へ／漢文の構造と訓読の仕方  
成句・格言を読む

#### 五 日記

借虎威 (戦国策)／蛇足 (戦国策)  
春晓 孟浩然／静夜思 李白／江雪 柳宗元  
送元二使安西 王维／黄鹤楼送孟浩然之广陵 李白  
凉州词 王翰／春望 杜甫／登岳阳楼 杜甫  
香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶题东壁 白居易  
鷄口牛後 (十八史略)  
★先従隗始 (十八史略)  
晏子之御 (史記)  
論語・孟子

#### 六 軍記

#### 七 紀行

#### 漢文編

#### 一 漢文入門

#### 二 故事成語

#### 三 漢詩

#### 四 史話

#### 五 思想

#### 六 文章

#### 七 小説

#### 八 復活

#### 九 韓愈

#### 十 干宝

#### 十一 千宝

小説(一)

羅生門

芥川龍之介

教科書 P.22～P.35

検印

漢字・語句を確認しよう

一 次の——線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 丹塗りが剝 [ ] げる。
- ② 捨てて顧 [ ] みない。
- ③ 頬 [ ] にきびができる。
- ④ 京都の町は衰微 [ ] していた。
- ⑤ 門上の楼 [ ] に上る。
- ⑥ 無造作 [ ] に捨てる。
- ⑦ 臭気 [ ] が鼻をつく。
- ⑧ 感情が嗅覚 [ ] を奪う。
- ⑨ 暫時 [ ] は忘れていた。
- ⑩ 床板の間に挿 [ ] す。
- ⑪ 語弊 [ ] があるかもしれない。
- ⑫ 行く手を塞 [ ] ぐ。
- ⑬ 老婆を罵 [ ] る。
- ⑭ 仕事が成就 [ ] する。

二 次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① シリ [ ] もちをつく。
- ② 戦争のヨハ [ ] を受ける。
- ③ 判断をコウテイ [ ] する。
- ④ 雨風のウレ [ ] えがない。
- ⑤ 幾つかのシガイ [ ] 。
- ⑥ 手で鼻をオオ [ ] う。
- ⑦ ヤ [ ] せた老婆。
- ⑧ オオマタ [ ] で歩み寄る。
- ⑨ ノド [ ] から声を出す。
- ⑩ アザケ [ ] るような声。
- ⑪ 老婆のエリ [ ] 髪をつかむ。
- ⑫ 手荒くケ [ ] 倒す。
- ⑬ 着物をワキ [ ] に抱える。

三 次の語句の意味を答えなさい。

- ① 暇を出す [ ]
- ② かたをつける [ ]
- ③ たかをくくる [ ]
- ④ 次の語句を使って短文を作りなさい。  
① 途方に暮れる [ ]
- ② 未練 [ ]
- ③ 成就 [ ]

文章の理解を深めよう

一 教科書22ページ～27ページ4行目までを読んで、物語の舞台となった時代や場所、登場する人物について考えよう。

1 物語の時代、季節、時刻について、どのようなことがわかりますか。次の空欄にあてはまる言葉を、①～③・⑤・⑥は本文中から抜き出し、④は考えて書きなさい。

- 時代：「①」や採烏帽子」という当時の風物と、「②」の下人」という描写から、平安時代であることがわかる。
- 季節：「③」が一匹止まっている」「夕冷えのする京都は、もう火桶ひおけが欲しいほどの寒さである」から、季節は「④」とわかる。
- 時刻：「ある日の⑤」とあり、「⑥」から降りだした雨」「夕闇はしだいに⑤」などから、日暮れ時であることがわかる。
- ① [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]
  - ② [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]
  - ③ [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]
  - ④ [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]
  - ⑤ [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]
  - ⑥ [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]

2 当時、羅生門はどのような状態となっていましたか。次の空欄にあてはまる言葉を、本文中から抜き出しなさい。

羅生門は、①の南端にある平安京の正門で、②を必要としたが誰も顧みなかった。そのため荒廃が進み、③を捨てていく習慣さえでき、それを目当てに④が集まってくるので、人々は⑤になると近寄りなくなった。

3 羅生門の下に腰を下ろしている〈下人〉は、どのような状態にありますか。次の空欄にあてはまる言葉を、本文中から抜き出しなさい。

- 〈下人〉は、京都の町が①した余波で、永年使われていた主人から、四、五日前に②。雨に降りこめられて、途方に暮れて羅生門の下にやってきた。さしあたり③をどうにかしようと、右の頬の④を気にしつつ思案するものの、どうするかは決められずにいた。
- ① [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]
  - ② [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]
  - ③ [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]
  - ④ [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]

4 この『すれば』は、いつまでたっても、結局『すれば』であった(26・7)とは、どういうことですか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 下人は、抽象的な考えを巡り続けるだけで、いつまでたってもそこから進めずにいるということ。  
イ 下人は、具体的な行動は考えついたものの、抽象的次元での勇気が出ずにいるということ。

ウ 下人は、抽象的次元での決意はついたものの、具体的な行動には踏み切れずにいるということ。

エ 下人は、具体的な手段を選ばないことを肯定するものの、抽象的な思考も否定できないということ。

□

■教科書27ページ5行目〜30ページ1行目までを読んで、羅生門の楼内の様子と〈下人〉の心情について考えよう。

1 「一人の男」(27・5)とあるが、①誰のことですか。また、②それがわかる部分を、本文中から十五字で抜き出さない。

① 「」

② 

<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>

2 〈下人〉が楼に上り、楼の内をうかがう様子について述べた次の文の空欄にあてはまる言葉を、本文中から抜き出さない。

〈下人〉は、はしごを二、三段上ったとき、①によって楼に誰かいるらしいと知る。②のように足音を盗み、慎重にはしごを上り、③楼の内をのぞいてみた。すると④に捨ててある死骸が目に入り、それが発する⑤に圧倒される。

① 「」  
② 「」  
③ 「」  
④ 「」  
⑤ 「」

3 「ある強い感情」(28・10)とあるが、〈下人〉のこの感情について説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、本文中から抜き出さない。ただし、①は三十一字の部分で、初めと終わりの五字ずつを記しなさい。②は二十一字で記しなさい。

この感情は、死骸の中にうずくまっていた、①が、木切れに火をともし、②行為によってもたらされた。

① 

<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>

② 

<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>

4 「ある強い感情」(28・10)とはどのような感情ですか。本文中から十五字以内で抜き出さない。

<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>

髪を抜かれた女も、蛇を魚と偽って売っていた。自分も女も、のだから、女も大目に見てくれるはずだ。

<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>

4 「ある勇氣」(33・1)とはどのような勇氣ですか。適切なものの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「悪」が自分にも備わっていたことを示す勇氣。
- イ 「悪」というものの本質的部分を見きわめる勇氣。
- ウ 「悪」への嫌悪感を確実に選び取っていく勇氣。
- エ 「悪」を行うことを積極的に肯定する勇氣。

□

5 下人が「嘲るような声で念を押しした」(33・7)のはなぜですか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 老婆の言葉だけでは、自分を正当化できると思えなかったから。
- イ 老婆の言質を取って、それを悪用するつもりがあったから。
- ウ 生き延びるためには、老婆の了解を得る必要があったから。
- エ 行動を悟られないよう、老婆の気をそらす必要があったから。

□

■教科書30ページ2行目〜34ページ5行目までを読んで、〈老婆〉の発言と〈下人〉の心情について考えよう。

1 〈老婆〉を取り押さえたとき、〈下人〉の心情はどのように変化しましたか。次の空欄にあてはまる言葉を、本文中から抜き出さない。

老婆の生死が自分の意志に①と意識した。↓険しく燃えていた②が冷める。↓安らかな得意と③を感じる。

① 「」

② 「」

③ 「」

2 「『この髪を抜いてな、……かつらにしようと思うたのじゃ。』(31・13)を受けて、〈下人〉の心情はどのように変化しましたか。次の空欄にあてはまる言葉を、本文中から抜き出さない。

老婆の答えが存外、①なのに失望する。↓憎悪の心と②を覚える。

① 「」

② 「」

3 「『なるほどな、死人の髪の毛を抜く……大目に見てくれるであら。』(32・2〜12)という〈老婆〉の主張について、次の空欄に適切な言葉を記しなさい。

死体の髪の毛を抜くことは、悪いこととは知っている。しかし、

□

小説(一)

ゴール

三崎亜紀

教科書 P.36 ~ P.41

検印

漢字・語句を確認しよう

一 次の——線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 建物が撤去「」 される。
- ② 契約「」 を確かめる。
- ③ 悲惨「」 なことになる。
- ④ ゴールの痕跡「」 がある。
- ⑤ 人混みに紛「」 れる。
- ⑥ 真っ青な空を仰「」 ぐ。

二 次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 店がミツシユウ「」 する。
- ② 場所をハアク「」 する。
- ③ 立場をタイゲン「」 する。
- ④ ラクタン「」 した表情。
- ⑤ 使命をカ「」 される。
- ⑥ ジユウジュン「」 なる人々。

三 次の語句の意味を答えなさい。

① 気だるい

② 忖む

③ 仮初め

④ 使命

⑤ 何処

四 次の語句を使って短文を作りなさい。

① 耳を疑う

② もともと

③ 闇雲に

④ 仰ぐ

文章の理解を深めよう

一 全体の構成を捉えよう。

1 小説全体を場面によって三つに分けたとき、二つ目の部分はどこからどこまでですか。ページと行とを記しなさい。

「」 ページ「」 行目「」 ページ「」 行目

二 「ゴール」(36・1)の描写について読み取ろう。

1 「ゴール」はどのような場所にありましたか。文章から三十二字で抜き出し、初めと終わりの五字ずつを記しなさい。

「」

2 「ゴール」についてどのようなことがわかりましたか。次の空欄にあてはまる言葉を、字数に合わせて本文中から抜き出ささい。

横断幕は用意されているが、① かわからない上に、② という聞いたこともないもの。

① 「」

② 「」

三 「係員らしき女の子」(36・3)の立場や様子を読み取ろう。

1 「係員らしき女の子」の立場はどのようなものですか。次の空欄にあてはまる言葉を、字数に合わせて本文中から抜き出ささい。

横断幕の横で ① というアルバイトを ② からしている。

2 「係員らしき女の子」の様子を表す言葉を、本文中から五字以内で三つ、抜き出ささい。

① 「」

② 「」

3 「私」が「耳を疑った」(37・9)のは、なぜですか。次の空欄にあてはまる言葉を、本文中から抜き出ささい。

係員の女の子が 「」とわかったから。

四 「ゴール」が「撤去」(38・9)されたことを知った「私」の気持ちや、そこに登場する「一人の男性」(38・12)の立場や様子を読み取ろう。

1 「何となく立ち去りがたく」(38・11)とあるが、このときの「私」の気持ちとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本当にゴールが移動してしまい、痕跡もないことが信じられず、ゴールを探したいという気持ち。

イ ゴールの痕跡はなくなってしまったが、ゴールを見たときの印象が強く、心ひかれる気持ち。

ウ ゴールが、横断幕と机が置かれただけの簡素なものであったこ

とを再認識し、残念に思う気持ち。

エ ゴールに魅力を感じていたことに気づき、自分もゴールを目指してスタートしたいと思う気持ち。

2 「一人の男性」は何をしているのですか。本文中から抜き出さない。

3 「一人の男性」はどのような様子でしたか。字数に合わせて本文中から抜き出さない。

男性の表情に ① はなく、 ② 状態だった。

① [ ] ② [ ]

4 「男性は靴を抱え直した」(39・5)とあるが、この行動から男性のどのような思いが読み取れますか。次の空欄にあてはまる言葉を、

①・②・③は本文中から抜き出し、④は考えて記しなさい。

ゴールは移動してしまっていたが、スタートした以上は、

を ② ③ のことであると、 ④ を新たにしている。

① [ ] ② [ ] ③ [ ] ④ [ ]

【五】この小説で描かれた「ゴール」がもつ意味は何か、考えよう。

1 「通勤する人々」(39・11)の様子を表している部分を、本文中から十七字で抜き出さない。

[ ] [ ]

2 「ゴールを目指していた男性」(39・15)は、どのような人物として描かれていますか。「他の人」「目指す」という言葉を用いて説明しなさい。

[ ] [ ]

3 「はい、スタート」(40・4)とあるが、「私」はどのような立場の人間になったことを象徴していますか。「従順な列」「一人」という言葉を用いて説明しなさい。

[ ] [ ]

4 「ゴール」とはどのようなものですか。適切なものを次の中から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他の人には理解されないが、個人にとって愉快なもの。
- イ 困難はつきまとうが、必ず個人を待っていてくれるもの。
- ウ 個人が自分の意見をもつことではなく、到達できないもの。
- エ たとえたどり着けなくても、目指さざるをえないもの。

[ ]

評論(二)

自然をめぐる合意の設計

関礼子

教科書 P.60 ~ P.65 検印

漢字・語句を確認しよう

【一】次の——線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 容赦 [ ] なく攻め入る。
- ② 多様な相貌 [ ] をもつ。
- ③ 当該 [ ] 自然の外部。
- ④ 町の営為 [ ] を考える。
- ⑤ 個性性が捨象 [ ] される。
- ⑥ 制度に拘束 [ ] される。

【二】次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① リンカク [ ] が変化する。
- ② イメージがクツガエ [ ] 。
- ③ センサイ [ ] で壊れやすい。
- ④ ヒゲマを銃でウ [ ] つ。
- ⑤ 減少がキグ [ ] される。
- ⑥ サケが川をサカノボ [ ] 。

⑦ ホカク [ ] 量を決める。

【三】次の語句の意味を答えなさい。

- ① 相貌 [ ]
- ② 当該 [ ]
- ③ 営為 [ ]
- ④ 捨象 [ ]
- ⑤ 拘束 [ ]

⑥ 唯一解 [ ]

【四】次の語句を使って短文を作りなさい。

- ① しゃいなや [ ]
- ② 容赦 [ ]
- ③ 先駆的 [ ]
- ④ 暗黙裡 [ ]



古文入門

絵仏師良秀

教科書 P.226 ~ P.228

検印

語句・文法を理解しよう

次の線部の本文中での読みを現代仮名遣いで書きなさい。

- ① おしおほひて
- ② 大路へ出でにけり
- ③ 衣着ぬ妻子なども
- ④ 来とぶらひけれど
- ⑤ せうとく
- ⑥ なんであ
- ⑦ かうこそ燃えけれ
- ⑧ 書き奉らば

次の線部の語句の意味として適切なものをそれぞれあとから選び、記号で答えなさい。

- ① 仏もおはしけり。(226・3)
  - ア 座っていらつしやつた
  - イ 並んでいらつしやつた
  - ウ いらつしやつた
- ② さながら内にありけり。(226・3)
  - ア 一部
  - イ 全部
  - ウ やはり
- ③ あさましきこと。(226・7)
  - ア 大変なこと
  - イ くだらないこと
  - ウ 見苦しいこと
- ④ 年ごろ(227・2)
  - ア このごろ
  - イ 長年
  - ウ 物心ついたときから
- ⑤ 悪しく書きけるなり。(227・5)
  - ア 気味悪く
  - イ おもしろく
  - ウ 下手に

- ⑥ 心得つるなり。(227・6)
  - ア わかる
  - イ 見つける
  - ウ 探し当てる
- ⑦ 今に人々めで合へり。(228・2)
  - ア おもしろがっている
  - イ ほめ合っている
  - ウ 珍しがっている

次の線部の動詞・形容詞のa活用の種類と、b活用形を答えなさい。

- ① さながら内にありけり。(226・3)
  - a  活用
  - b  活用
- ② 見れば、(226・6)
  - a  活用
  - b  活用
- ③ あさましきこと。(226・7)
  - a  活用
  - b  活用
- ④ 心得つるなり。(227・6)
  - a  活用
  - b  活用
- ⑤ させる能もおはせねば、(227・8)
  - a  活用
  - b  活用

文章の内容を読み取ろう

次の①・②の線部は誰の誰に対する敬意を表していますか。それぞれあとから選び、記号で答えなさい。

- ① 人の書かする仏もおはしけり(226・2)
  - 誰の  ↓誰に対する
  - ア 作者
  - イ 良秀
  - ウ とぶらひに来る者ども
  - エ 仏
- ② 仏だによく書き奉らば、(227・7)
  - 誰の  ↓誰に対する
  - ア 作者
  - イ 良秀
  - ウ とぶらひに来る者ども
  - エ 仏

「いかに。」(226・8)、「こはいかに。」(227・3)に込められた気持ちとして適切なものをそれぞれあとから選び、記号で答えなさい。

- ① いかに。(226・8)
  - ア 無事でいらつしやいましたか
  - イ どこへ逃げたのですか
  - ウ どこが火事なのですか
  - エ どうしたのですか
- ② こはいかに。(227・3)
  - ア どうして、物の怪がついたのですか
  - イ どうして、笑って立っているのですか
  - ウ どうして、炎ばかり見ているのですか
  - エ どうして、得をしたのですか

「わるく書きける」(227・2)とあるが、何を「わるく」書いていたのですか。本文中から抜き出しなさい。

「これこそ、せうとくよ。」(227・6)とあるが、「これ」が指すものを簡潔に書きなさい。

「この道を立てて、」(227・7)という言葉には、良秀のどのような気持ちが表れていますか。適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 火災をうまく描ける絵仏師になりたいと思っている。
- イ 絵仏師としての道を極めたいと思っている。
- ウ 絵仏師という職業を卑下している。
- エ 絵仏師という職業を誇りに思っている。

この物語から読み取れる良秀の人物像として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 絵を描くことを最も大切に考え、他のことに執着がない。
- イ 描いた仏画を丁寧に扱っていて、信仰心が篤い。
- ウ 不幸なできごととも積極的に仕事に生かそうとしている。
- エ 他の人より仏をうまく描きたいという野心がある。



物語 竹取物語

教科書 P.232 ~ P.235

検印

【かぐや姫の生い立ち】

語句・文法を理解しよう

■ 次の語句の本文中での読みを現代仮名遣いで書きなさい。

- ① よろづ
- ② うつくしうて
- ③ みたり
- ④ やうやう

■ 次の——線部の語句を口語訳しなさい。

- ① あやしがりて、寄りて見るに。(232・3)
- ② いとうつくしうてみたり。(232・4)
- ③ 竹の中におはするにて知りぬ。(232・5)

- ④ うつくしきこと、限りなし。(232・7)
- ⑤ やうやう豊かになりゆく。(233・5)

■ 次の——線部の用言の a 品詞名と、b 活用の種類、c 活用形を答えなさい。

↓ P. 223 品詞分類・用言と活用形

- ① それを見れば、(232・4)  
a [ ]  
b [ ]  
活用 [ ]  
c [ ]  
形 [ ]
- ② うつくしきこと、限りなし。(232・7)  
a [ ]  
b [ ]  
活用 [ ]  
c [ ]  
形 [ ]
- ③ いと幼ければ、(232・7)  
a [ ]  
b [ ]  
活用 [ ]  
c [ ]  
形 [ ]

- ④ 豊かになりゆく。(233・5)  
a [ ]  
b [ ]  
活用 [ ]  
c [ ]  
形 [ ]

■ 次の文の中から、係り結びを作っている係助詞と結びの語を抜き出しなさい。

↓ P. 230 係り結び

もと光る竹なむ一筋ありける。(232・3)

係助詞「 」 結びの語「 」

■ 次の——線部の助動詞について、ここで意味をそれぞれあとから選び、記号で答えなさい。

↓ P. 245 助動詞

- ① よろづのことに使ひけり。(232・1)  
ア 推量 イ 完了 ウ 過去  
エ 尊敬 オ 使役 カ 断定
- ② 竹の中におはするにて知りぬ。(232・5)  
妻の軀に預けて養はず。(232・6)
- ③ 妻の軀に預けて養はず。(232・6)

文章の内容を読み取ろう

■ 「竹取の翁」(232・1)の仕事はどのようなことですか。次の文の空欄に入る言葉を答えなさい。

野山で [ ] を取り、 [ ] を作る。

■ 次の①～③の主語を、本文中から抜き出しなさい。

- ① 「あやしがりて、寄りて見る」(232・3)
- ② 「竹の中におはする」(232・5)
- ③ 「うつくしきこと、限りなし」(232・7)

- ① [ ]
- ② [ ]
- ③ [ ]

■ 「それ」(232・4)は何を指していますか。本文中から三字で抜き出しなさい。

[ ]

■ 「手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ」(232・6)の口語訳として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 翁は竹筒を手の中に入れて、家へ持って帰ってきた。
- イ 翁は子どもを手の中に入れて、家へ持って帰ってきた。
- ウ 翁は竹筒を手の中に入れて、家へ持って帰らない。
- エ 翁は子どもを手の中に入れて、家へ持って帰らない。

■ 「かくて、翁やうやう豊かになりゆく」(233・5)とあるが、翁が豊かになったのはなぜですか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもを育てるためにこれまで以上によく働いたから。
- イ 子どもがいた竹にはたくさん黄金が入っていたから。
- ウ 高価な光る竹をたくさん見つけることができたから。
- エ 筒の中に黄金が入った竹を何度も見つけたから。

■ 本文の内容に合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 翁は、竹を取りに出かけて根もとの光る竹を見つけた。
- イ 翁は、竹の中に三歳くらいの女の子がいるのを見つけた。
- ウ 竹の中にいた子は、幼いのにとっても美しい子であった。
- エ 翁は、竹の中にいた子連れて帰り、籠に閉じ込めた。

日記

土佐日記

紀貫之

教科書 P.274 ~ p.280

検印

【問出】  
語句・文法を理解しよう

■ 次の——線部の本文中での読みを歴史的仮名遣いで書きなさい。

- ① 日記といふもの
- ② 戌の刻
- ③ 県の四年五年
- ④ 解由など取りて
- ⑤ 住む館より出でて
- ⑥ 二十二日に
- ⑦ ありとある上下
- ⑧ 童まで

■ 次の——線部の語句を口語訳しなさい。

- ① いささかにもに書きつく。(274・3)

■ 次の——線部の助動詞(両方とも終止形は「なり」)について、a意味と、b活用形を答えなさい。  
↓ P.245 助動詞

- ① 男もすなる日記といふものを、(274・1) 形
- ② 女もしてみむとて、するなり。(274・1) 形
- ③ 平らかに願立つ。(274・8)
- ④ 馬のはなむけす。(275・1) 形
- ② ののしるうちに、夜更けぬ。(274・7) 形

- 次の——線部の助動詞について、aこでの意味をあとから選び、記号で答えなさい。(同じ記号を何度使ってもよい。)また、b活用形を答えなさい。 ↓ P.245 助動詞
- ① 女もしてみむとて、(274・1) 形
  - ② 船に乗るべき所(274・5) 形
  - ③ 知る知らぬ、(274・5) 形
  - ④ よく比べつる人々(274・6) 形
  - ⑤ 夜更けぬ。(274・7) 形
  - ⑥ 馬のはなむけしたる。(275・7) 形
- ケ 当然 コ 願望
- ア 打消 イ 完了 ウ 過去 エ 断定  
オ 推量 カ 伝聞 キ 意志 ク 受身

文章の内容を読み取ろう

■ 「ある人、」(274・4)とは、誰のことですか。

■ 「日しきりに、とかくしつ、」(274・6)を口語訳しなさい。

■ 「いとあやしく、潮海のほとりにて、あざれあへり。」(275・2)とあるが、どんなことを「いとあやしく」というのですか。次の文中の——線部の「あざる」(掛詞)の意味を、それぞれ答えなさい。  
ものが「あざる」はすのな潮海なのに、人びとが「あざれ」合っていること。

■ 「国に必ずしも言ひ使ふ者にもあざさなり。」(275・5)について、答えなさい。

1 ——線部「さなり」の二つの助動詞について、文法的に説明しなさい。

2 これと同じ組み合わせの助動詞があと一か所用いられています。該当する部分を含めて、本文中から一文節(六字)で抜き出さなさい。

-----

■ 「これ」(275・6)とは、誰を指していますか。姓名で答えなさい。

■ 「今は。」と見えざるを、(275・9)の「今は」の下に省略されていると考えられる言葉を、現代語で答えなさい。

■ 次の表現は、それぞれ対比するものをあげて言葉遊びを意識しています。対比されている言葉を答えなさい。

① 「船路なれど、馬のはなむけす。」(274・8)

「と」

② 「二字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。」(275・14)

「と」

漢文入門

漢文の世界へ 漢文の構造と訓読の仕方

教科書 P.300 ~ P.305

検印

基本的な用語の確認をしよう

一 次の空欄A～Dに入る適切な語句をあとから選び、記号で答えなさい。  
 「春眠不覚曉」のように漢字だけで書かれた原文が（A）であり、これを日本語の文として読むために、読む順序を示す記号である（B）や（C）を付けた。「春眠不覚曉」の右下の「エ」「ヲ」、左下にある「レ」などの小さな文字がその記号である。左下の「レ」は（B）の一種で「レ点」といい、一字上に戻って読むことを示す。（B）や（C）をまとめて（D）という。

- ア 白文 イ 訓点 ウ 中国  
 エ 送り仮名 オ 返り点
- |   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| A | B | C | D |
|---|---|---|---|

漢文の基本構造と訓読の仕方を学ぼう

一 次の漢語の構造と同じものをあとから選び、記号で答えなさい。  
 A 地震 B 白雲 C 風雨  
 D 成功 E 不正  
 ア 優良 イ 読書 ウ 雷鳴  
 エ 可視 オ 再会

D	A
E	B
	C

二 訓読の仕方について、次の空欄A～Hに入る語句をあとから選び、記号で答えなさい。

漢文を訓読するときには、句読点を付け、日本語の助詞や活用語尾に相当するものを（A）として補う。（A）は、主として漢字の右横下に片仮名で付ける。語順を変えて読む必要のあるときには、（B）

- ア 上中下 イ 一・二 ウ レ  
 エ 訓点 オ 返り点 カ 送り仮名  
 キ 置き字 ク 再読文字
- |   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| A | B | C | D |
| E | F | G | H |

を左下に付ける。（B）には次のようなものがある。  
 （C）点……下の字から、すぐ上の字に返って読む。  
 （D）点……二字以上を隔てて下から上へ返って読む。  
 （E）点……（D）点の付いた句を間に挟んで返って読む。  
 句読点・（A）・（B）をまとめて、（F）という。  
 訓読する際に、一字で二度読まなければならない文字を（G）という。また、そのはたらきや意味を前またはあとの文字の送り仮名で示し、その文字そのものは読まない文字がある。これを（H）という。

三 次の空欄に返り点に従って読む順番を数字で書き込みなさい。

- |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| ① | レ | レ | レ | 。 |
| ② | 三 | レ | 二 | 一 |
| ③ | 下 | 二 | 一 | と |
| ④ | 下 | 二 | レ | 中 |

四 次の□の中の番号順に読めるように、返り点を付けなさい。

- |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 3 | 1 | 2 | 6 | 4 | 5 |
| ② | 6 | 5 | 1 | 4 | 3 | 2 |
| ③ | 7 | 3 | 1 | 2 | 4 | 6 |
| ④ | 1 | 8 | 5 | 2 | 4 | 3 |

五 次の再読文字の読み方と意味を、それぞれあとから選び、記号で答えなさい。

- |   |       |    |
|---|-------|----|
| ① | 当…読み方 | 意味 |
| ② | 猶…読み方 | 意味 |
| ③ | 未…読み方 | 意味 |
| ④ | 且…読み方 | 意味 |

（読み方）  
 ア まさニ（ス）ベシ イ まさニ（セント）す  
 ウ いまダ（セ）ズ エ なホ（ノ・ガ）ゴトシ  
 （意味）  
 オ 今にも（しよう）と する カ まだ（し）ない  
 キ 当然（す）べきだ ク ちようどと同じだ

六 次の文を書き下し文にしなさい。

- ① 他山之石、可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>攻<sub>レ</sub>玉。  
 ② 過<sub>キタル</sub>猶<sub>ハホ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>バ</sub>。  
 ③ 千里之行、始<sub>マ</sub>於<sub>二</sub>足<sub>下</sub>。

七 （ ）内の書き下し文に従って、それぞれの白文（訓点の付いていない文）に、訓点を付けなさい。

- ① 吾日三省吾身。 （吾日に吾が身を三省す。）  
 ② 未嘗敗北。 （未だ嘗て敗北せず。）  
 ③ 引酒且飲之。 （酒を引きて且に之を飲まんとす。）  
 ④ 温故而知新。 （故きを温ねて新しきを知る。）

史話

先従隗始

教科書 P.332 ~ P.333 検印

語句・句形を確認しよう

次の語句の本文中での読みを歴史的仮名遣いで書きなさい。

- ① 与ニ
- ② 雪ヅ
- ③ 視ス
- ④ 事ヲ
- ⑤ 使ム
- ⑥ 且ッ
- ⑦ 況シヤ
- ⑧ 豈ニ

次の語句の本文中での意味を答えなさい。

- ① 辞 (332・5)

- ニ
- ンヤ
- ツ
- ム
- フ
- ス
- グ
- ニ

- ② 孤 (332・6)

- ③ 報ス (332・7)

- ④ 与共ニ 国ヲ (332・7)

- ⑤ 雪ヅ (332・7)

- ⑥ 古 (333・1)

- ⑦ 期年 (333・4)

- ⑧ 致ス (333・4)

- ⑨ 趨 (333・7)

次の句法の訳し方をそれぞれあとから選び、記号で答えなさい。

- ① Aスラ ッ Bス。 況シヤ C乎。

- ② Aニ (ナリ) 於 Bヨリモ。

- ③ 豈ニ A哉。

ア どうして A (しよう) か、いや A (し) ない。

イ A でさえ B である。まして C ならぬ おさら B だ。

ウ B よりも A (だ)。

次の文を書き下し文にしなさい。また置き字を抜き出しなさい。

況賢於隗者、豈遠千里哉。(333・5)

置き字

文章の内容を読み取ろう

「弔死問生、卑辞厚幣、」(332・4) について、誰が何のためにしたことか説明しなさい。

「先生視可者。」(332・8) の口語訳として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 先生がふさわしい人物かどうか見せてください。
- イ 先生が考えるふさわしい人物を説明してください。
- ウ 先生がふさわしい人物を推薦してください。
- エ 先生がふさわしい人物であることを教えてください。

「有下以千金使消人、求千里馬者。」(333・1) を書き下し文にしなさい。

「買死馬骨五百金而返。君怒。」(333・2) について、「君」が怒った理由を説明しなさい。

「今、王必欲致士、先従隗始。」(333・4) の解釈として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 王が賢者になりたいのなら、郭隗を見習うべきです。
- イ 王が賢者になったとしたら、郭隗も王に従うでしょう。
- ウ 王が賢者を必要とするなら、郭隗が探して参りましょう。
- エ 王が賢者を必要とするなら、郭隗を優遇してください。

本文中の「千里の馬」と「死んだ馬」がたとえているものを、本文中からそれぞれ漢字で抜き出しなさい。

千里の馬  死んだ馬

「師事之。」(333・6) の①意味を説明し、また②「之」が指しているものを答えなさい。

- ①
- ②

郭隗が昭王に言いたかったことを本文の内容をふまえて説明しなさい。

## 解答

## 漢字・語句を確認しよう

- 一 ①は ②かえり ③ほお ④すいび ⑤ろう  
⑥むぞうさ ⑦しゅうき ⑧きゅうかく  
⑨ざんじ ⑩さ ⑪こへい ⑫ふさ ⑬ののし  
⑭じょうじゆ ⑮ぶべつ ⑯うら

- 二 ①尻 ②余波 ③肯定 ④憂 ⑤死骸  
⑥覆 ⑦瘦 ⑧大腿 ⑨喉 ⑩嘲(嘲)  
⑪襟 ⑫蹴 ⑬脇

- 三 ①使用人などをやめさせる。  
②物事の決着をつける。

- 四 ③その程度だろうと安易に予想する。

- ④ ①(例) 解決方法が見いだせず、遂方に暮れてしまった。  
②(例) 思い切つて本棚の書籍を処分したが、まだ若干の未練が残っている。

- ③(例) 長年の悲願が成就する。

## 文章の理解を深めよう

- 一 ①市女笠 ②平安朝 ③きりぎりす ④秋

- ⑤暮れ方 ⑥申の刻下がり

- ⑦朱雀大路 ⑧修理 ⑨死人 ⑩からす

- ⑪暮れ方

- ⑫衰微 ⑬暇を出された ⑭明日の暮らし

- ⑮にきび

- ⑯ウ

- ⑰下人

- ②赤くうみを持ったにきびのある頬

- ①火の光 ②やもり ③恐る恐る

- ④無造作 ⑤臭気

- ③ ①檜皮色の着くような老婆

- ②死骸の一つの顔をのぞきこむように眺

- めていた

- ④六分の恐怖と四分の好奇心

- ①支配されている ②憎悪の心 ③満足

- ②平凡 ③冷ややかな侮蔑

- ③(例) 飢え死にをしないためにしかたがなくそうした

- ④工

- ⑤イ

## 解説

## 文章の理解を深めよう

- 一 冒頭の一行の形式段落で、いつ(＝ある日の暮れ方)、どこで(＝羅生門の下で)、誰が(＝一人の下人が)、何を(＝雨やみを待っていた)という、この物語の基本的枠組みが提示される。そして次の段落から、さらに詳細な情報が語られている。

時代：「市女笠」は、平安時代、女性が外出の際にかぶる笠で、「揉烏帽子」は男性が被服

なお、羅生門を包んで降りこめる「雨」や

「重たく薄暗い雲」などの情景描写からも、思案しても決められずにいる〈下人〉の閉塞感が読み取れる。

- 4 「すれば」とは、手段を「選ばないとすれば」である。その答えとして「盗人になるより外にしかたがない。」(26・9)とまでは至つたのだが、「積極的に肯定する(＝盗賊になるという具体的行動に出る)だけの、勇気が出ずにいた」(26・9)のである。

ア 「盗人になるより外にしかたがない。」と、抽象的な次元からは抜け出している。

イ 「抽象的」と「具体的」が逆である。

エ 「抽象的な思考も否定できない」が誤り。

- 二 1 「その男の右の頬」は「赤くうみを持ったにきびのある頬」(27・7)とわかる。

2 〈下人〉が楼に上り、中をうかがう様子は、27ページ14行目～28ページ11行目に書かれている。

「楼の上からさす火の光」(27・6)によって、「死人ばかりだとたかをくくっていた」(27・8)の「誰か火をとほして、……動かしているらしい」(27・9)と〈下人〉は判断する。「やもりのように」は、直喩。「臭気」は、無造作に転がっている腐乱した死骸の放つ死臭である。圧倒されたことは想像に難くない。

3 この感情は、「死骸の中にうずくまっていた人間」(28・12)を目撃したことによってたらされた。問題文は、誰が、何をしているところを見たのかをまとめている。

具体的には、「檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆」(28・12)が、「死骸の一つの顔をのぞきこむように眺めていた」(27・14)行為を目にしたことである。

4 「六分の恐怖」とは正体不明の老婆がなす行為の不可解さからくる恐怖、「四分の好奇心」とは怖いもの見たさの好奇心であろう。

③ 1 30ページの最後～31ページ3行目から、老婆を捕らえて、険しく燃えていた憎悪が冷えていった〈下人〉の心情の変化を捉える。

2 この老婆の言葉のすぐあとに〈下人〉の心情は語られている。「冷やかな侮蔑」とは、「失望」によって生まれた、老婆をさげすむ心情である。「存外、平凡なのに失望した」からは、老婆の答えが何か特異なものであろうことを期待していたと推測できる。

3 老婆の話の中に、髪を抜かれた女も「せねば、飢え死にをするのじゃ、しかたがなくした」と(32・8)、自分も「せねば、飢え死にをするのじゃ、しかたがなくした」と(32・9)と、同じ内容の言葉が繰り返されている。飢え死にをしないためにしかたなくする、というのが、老婆の主張である。

4 「ある勇氣」とは、「さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣」(33・1)、「この老婆を捕らえた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣」(33・2)である。つまり、飢え死にをしないために、手段を「選ばない」ことを肯定する勇氣、「悪を憎む心」を捨て、盗

のときにかぶった帽子。服装の記述から時代が読み取れる。「平安朝の下人」(24・11)という記述からも明らか。

季節：現代では夏のイメージがあるが、「きりぎりす」は秋の季語になっている虫。こおろぎの古称でもある。「火桶が欲しいほどの寒さ」(26・12)とあるのは、冬ではなく、晩秋の寒さと考えられる。

時刻：「申の刻下がり」(24・11)は、脚注にもあるように、午後四時過ぎ頃。

2 「羅生門が、朱雀大路にある……」(22・3)、また脚注から羅生門の位置がわかる。

「洛中がその始末である(＝さびれ方はひととおりでない)から」(22・9)以降に、羅生門の修理など顧みられなかったこと、死人が捨てられるので人々が近寄らなかったことが書かれている。

3 〈下人〉の状態については、教科書24ページから読み取る。

「右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた」(24・2)という表現からは、〈下人〉の若さと所在のなさがかげえる。〈下人〉がこのような状態になった理由は、「この衰微(＝京都の町の衰微)の小さな余波」(24・8)で、主人から「暇を出された」(24・8)からである。

このあと、「さしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして……とりとめもない考えをたどりながら、……聞くともなく聞いていた」(24・12～15)とある。

人になる勇氣である。

アの「自分にも備わっていたことを示す」よりも積極的な肯定である。

5 「嘲るような声を押しした」のは、相手の言質(証拠となる言葉)を取つたうえで、それを悪用するつもりだったからである。そのあとに取るべき行動が用意されているから「嘲るような声」なのである。

続く〈下人〉の言葉「では、おれが引剣をしよう」と恨むまいな。おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ」(32・10)に明らかである。

〈下人〉はこのあと、老婆から剥ぎ取つた着物を抱えて「夜の底」へ駆け下りる。「夜の底」とは、これからこの男が生きていこうとする世界を端的に示している。そして、「下人の行方は、誰も知らない。」と、男のその後に言及することなく、作者はこの物語を結んでいる。

解答

漢字・語句を確認しよう

- 一 ①てつきよ ②けいやく ③ひさん
- ④こんせき ⑤まぎ ⑥あお
- 二 ①密集 ②把握 ③体現 ④落胆 ⑤課
- ⑥従順

- 三 ①なんとなくだるいこと。
- ②一つの場所に少しの間立ち止まっていること。
- ③そのときに限つてあること。
- ④自分に課せられたつとめ。
- ⑤どい。

- 四 ①(例) 彼の事故のしらせに耳を疑う。
- ②(例) ここはもとと父の土地だ。
- ③(例) 道に迷つて、闇雲に歩き回る。
- ④(例) いい案が浮かばず、天を仰ぐ。

文章の理解を深めよう

- 一 1 38(ページ) 7(行目) ~ 39(ページ) 10(行目)
- 二 1 間口の狭い、細長い空間
- 2 ①何のゴール ②移動する
- 三 1 ①ゴールを守る ②二年前
- 2 暇そう・気だるそう・無責任(さ)
- 3 待つゴールするかもわからない誰かを、ずっと待ってる
- 四 1 イ
- 2 ゴールを目指している

解説

文章の理解を深めよう

- 3 ①落胆 ②何も示さない
- 4 ①(新たな) ゴール ②目指す ③当然
- ④(例) 決意
- 五 1 ベルトコンベンアーに乗せられたように
- 2 (例) 他の人とは違うところを目指す人物。
- 3 (例) 従順な列から外れて、他の人と違った道に入り込み、一人で歩く立場になったこと。
- 4 エ

解説

文章の理解を深めよう

- 一 1 小説全体は、三つの部分に分けられる。「私」が「ゴール」を見つけ、「係員らしき女の子」(36・3)に何のゴールか話を聞いている場面。ゴールを目指す「一人の男性」(38・12)に出会う場面。三つ目は、「私」が「スタート」に立つ場面である。
- 二 1 「ゴール」の場所については、「間口の狭い」(36・2)で始まる一文で説明されている。
- 2 「係員らしき女の子」との会話から、「ゴールする人」(37・1)しか「何のゴール」(36・10)かわからず、しかも一ヶ月程度で「移動する」(37・16)ものだとわかる。
- 三 1 会話から、「係員らしき女の子」が、「ゴール

評論(一)

自然をめぐる合意の設計

解答

漢字・語句を確認しよう

- 一 ①ようしゃ ②そうぼう ③とうがい
- ④えいいい ⑤しゃしょう ⑥こうそく
- 二 ①輪郭 ②覆 ③繊細 ④撃 ⑤危惧
- ⑥遡 ⑦捕獲

- 三 ①顔かたち。容貌。
- ②そのことに関係あること。
- ③いとなみ。行為。
- ④概念を抽象する際に、他の側面や性質を考へないこと。
- ⑤行動や判断の自由を制限すること。
- ⑥たった一つの正解。

- 四 ①(例) 席に着くやいなや話だした。
- ②(例) 雨が体に容赦なくたたきつける。
- ③(例) 彼の研究は、情報化社会にとって先駆的なものとなった。
- ④(例) その場のルールが暗黙裡に理解される。

文章の理解を深めよう

- 一 1 ①視覚 ②身を置く ③イメージ
- ④繊細で壊れやすい ⑤容赦なく
- 2 ①遠くから眺めた
- 3 ①当該自然の外部から眺めた自然や自然保護についての言説
- ②自然に根を下ろした人々のローカルな文

脈での言説

- 一 1 ①自然保護の目線
- ②シンボルの要素
- 2 ア
- 3 ①絵を見る ②営み
- ③絵のように見える自然
- 4 Aさんが自然保護に理解がない、ということ
- 5 ウ
- 6 ①自然保護 ②営為(営み) ③思い
- ④正当性

解説

文章の理解を深めよう

- 一 1 冒頭で、「自然の輪郭」(60・1)が立ち位置で変化することを説明している。近づく、視覚だけではない、五感を使って感じられるものになる。遠くから眺めているとき、自然は「繊細で壊れやすい」(60・4)と思うが、「自然とともに暮らしている」(60・5)場合は、容赦なく攻め入ってくるものに感じられる。
- 2 1で見たように、「遠くから眺めた」(60・1)

を守るのが仕事」(38・5)というアルバイトを、「二年前」(37・7)からしているとわかる。

2 「係員らしき女の子」は、「暇そう」(36・4)に頬杖をついて、「気だるそう」(36・7)にしていた。「ゴール」の移動についても「無責任さ」(38・6)を感じさせる態度で応じている。

3 「私」は「係員らしき女の子」が、ゴールする人を見ていないことを知り、いつ来るかわからない人を待つことに驚いている。

4 「私」がこの「ゴール」の存在を印象強く感じていた様子に注意する。

2 「私」は「男性」(38・12)が「ゴール」だった場所を見つめる様子から、「ゴールを目指している方」(38・14)だとわかったのである。

3 男性の表情は、二か所で表されている。

4 「鞆を抱え直した」(39・5)は、改めて「新たなゴール」(39・4)を目指す気持ちを強くしたことを表現している。

5 1 「通勤する人々」の姿は「ベルトコンベンアー」(39・11)に乗せられた姿にたとえて表現されている。

2 「通勤ラッシュとは無関係な方向に歩く姿」(39・14)から、他の人たちとは目指すところが違う様子が読み取れる。

3 「立ち止まった」(40・1)ことで、通勤の列からはじき出され、従順な人々とは違った道を歩くことになったのである。

4 「移動するゴール」は、たどり着けるかわからないもので、課せられた使命のように目指すしかないものである。

場合と、自然のなかで暮らす場合は、自然の見え方が違う。

3 「ここでは」(60・8)で始まる一文に、「遠景」と「近景」の定義が述べられている。

1 自然の外部にいる人は、「自然保護の目線」(61・5)から、ヒゲマの「シンボルの要素」(61・2)に反応して抗議している。

2 「なぜか。エピソードを示そう」とあるので、エピソードから読み取る。Aさんたちは自然保護を行いながら、その中で暮らしているのである。

3 都会の人は「絵を見るように」(61・11)自然を捉えているが、Aさんたちは、自然のなかで暮らしながら自然保護につながる行動をし、「自然を絵のように見せている」(62・1)と考えている。

4 「むしろ」(61・15)という言葉から、「その」の指すものが直前の部分にあることを読み取る。

5 Aさんたちは、「暮らしの安全上」(61・9)からクマを撃つこともあるが、サケなどの捕獲量を制限するなどクマの保護につながる活動をしており、人間と自然のバランスを考えている。

6 自然保護という点で気持ちと同じであっても、遠くから見ている人たちは、自然の内部からの視点はないので、その主張を受け入れることはないということ。

三 1 「自然をめぐるゆるやかで曖昧な合意」(62・14)の内容は、教科書63ページ4行目以降に述べられている。

2 文章の結論が最後の一文にまとめられている。

解答

語句・文法を理解しよう

- 一 おしおにおいて ② おおし
- ③ めこ ④ とぶらい
- ⑤ しょうとく ⑥ なんじょう
- ⑦ こうこそ ⑧ たてまつらば
- 二 ① ウ ② イ ③ ア
- ④ イ ⑤ ウ ⑥ ア
- ⑦ イ
- 三 ① a ラ行変格 b 連用
- ② a 上一段 b 已然
- ③ a シク b 連体
- ④ a 下二段 b 連用
- ⑤ a サ行変格 b 未然
- 文章の内容を読み取ろう
- 一 ① ア ↓ エ ② イ ↓ エ
- 二 ① エ ② イ
- 三 不動尊の火災
- 四 (例) 炎が燃える様子がわかったこと。
- 五 イ・エ
- 六 ア

解説

語句・文法を理解しよう

- 一 ①・②・④ 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」と読む。
- ⑤ ⑥ 段の仮名に「う」または「ふ」が続くときは「ヨー」と読む。
- ⑦ 段の仮名に「う」または「ふ」が続くときは、「オー」と読む。
- 二 ① 「おはす」は、「あり」の尊敬語。
- ② 「さながら」は、「全部」という意味の副詞。
- ③ 「あさまし」が終止形の形容詞。意外で驚きあきれるときに使う言葉。
- ④ 「年ごろ」は、「長年」という意味の名詞。
- ⑤ 「悪しく」は、形容詞「悪し」の連用形で、「下手に」「あまりうまくなく」という意味。
- ⑥ 「心得」は、「わかる」「気づく」という意味の動詞で、下二段活用。
- ⑦ 「めづ」は、「かわいがる」「ほめる」という意味の動詞。
- 三 ① 直後に「けり」が続く場合は連用形。ラ行変格活用には、「あり」のほか、「をり」「はべり」などがある。
- ② 「見る」は上一段活用動詞。直後に助詞「ば」があるので、已然形とわかる。
- ③ 形容詞シク活用。終止形は「あさまし」。
- ④ 終止形は「心得」。直後の「つる」は完了の助

物語

竹取物語

ノート P.14 ~ P.15

【かぐや姫の生い立ち】

解答

語句・文法を理解しよう

- 一 ① よろず ② うつくしゅうて
- ③ いたり ④ ようよう
- 二 ① 不思議に思っ ② たいそう
- ③ いらっしやる ④ かわいらしい
- ⑤ しだいに
- 三 ① a 動詞 b マ行上一段 c 已然
- ② a 形容詞 b シク c 連体
- ③ a 形容詞 b ク c 已然
- ④ a 形容動詞 b ナリ c 連用
- 係助詞：なむ 結びの語：ける
- 四 ① ウ ② イ ③ オ
- 文章の内容を読み取ろう
- 一 竹・いろいろなもの
- ② 三寸ばかりなる人
- ③ 三寸ばかりなる人
- 三 筒の中
- 四 イ
- 五 エ
- 六 ア

語句・文法を理解しよう

解説

- 一 ① 「ぢ・づ」は現代仮名遣いでは「じ・ず」に直すことが多い。②・④ ア段・イ段の仮名に「う」や「ふ」が続くときは、それぞれ「オー」「ユー」と読む。
- 二 ① 「不思議だ」「身分が低い」という意味の形容詞「あやし」も覚えておこう。④ 「うつくし」は現代語の「美しい」とは異なり、小さい物や幼い者に愛着を感じる気持ちを表し、「かわいらしい」などと訳す。⑤ 「やうやう」は物事が少しずつ変わっていく様子を表す副詞で、「次第に」などと訳す。
- 三 ② ③ 形容詞の活用の種類は連用形にしたときの形で見分ける。
  - ・ うつくしく ↓ シク活用
  - ・ 幼く(をさなく) ↓ ク活用
- ④ ナリ活用の連用形には「なり」「に」という二つの形がある。
- 四 係り結びの法則を覚えておこう。

係助詞	結びの語	意味
ぞ・なむ	連体形	強意
や・か	疑問・反語	強意
こそ	已然形	強意

こは係助詞「なむ」があるので、結びの語(過去の助動詞「けり」)が連体形になっている。意味は強意。結びの語は、「ありける」などと余分なところまで抜き出さないこと。

動詞「つ」の連体形。

⑤ 終止形は「おはす」。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形。

文章の内容を読み取ろう

- 一 ① 「人の書かする仏」(226・2)とは、人が良秀に注文して、良秀に書かせた仏の絵のことである。それに対して、筆者が敬意を払っている。
- ② 良秀が「仏だに」(227・7)と言っていることから、良秀の仏に対する敬意だとわかる。
- 二 ① 「いかに」の下に、ここでは「したるぞ」などの言葉を入れることができる。
- ② 「ときどき笑ひけり」(227・1)という良秀の行動や、「あはれ、しつるせうとくかな」(227・2)という言葉聞いて、「とぶらひに来たる者ども」が、奇妙に思ったのである。
- 三 「年ごろ、不動尊の火災を悪しく書きけるなり」(227・5)という部分から、「わろく書きける」ものが「不動尊の火災」であることがわかる。
- 四 「年ごろ、不動尊の火災を悪しく書きけるなり」(227・5)から、良秀は自分の書く火災に納得していなかったことがわかる。ところが、今回の火事で、炎がどのように燃えているかわかった。このことが、「せうとく」なのである。
- 五 「この道を立てて」(227・7)という言葉には、絵仏師として仏を描くことへの自尊心や、よりよく仏を描いて、絵仏師の道を極めようとする姿が読み取れる。
- 六 家財や家族よりも、絵を描くことを最重視していることが、良秀の言動に表れている。
- 一 竹取の翁の仕事は、本文232ページの1～2行目に説明されている。
- 二 ① 根もとの光る竹を見つけて、「あやしがりて、寄りて見」たのは、「竹取の翁」。② その竹の中に「おはする(＝いらっしやる)」のは「三寸ばかりなる人」。③ このうえなく「うつくし(＝かわいらしい)」いのも「三寸ばかりなる人」。
- 三 指示語「それ」までの文脈を丁寧にたどろう。竹取の翁が「もと光る竹」を見つけ近寄ってみると、「筒の中」が光っていた。そして「それ」を見ると「三寸ばかりなる人」がいたというのである。三寸ばかりなる人がいたのは「もと光る竹」の「筒の中」である。制限字数に注意。
- 四 翁が帰って帰ってきたのは竹の中で見つけた子どもなので、ア・ウは不適。文末の「ぬ」は完了の助動詞なので、「た」と訳す。
- 五 「かくて」は直前の「竹取の翁、竹を取るに、…重なりぬ。」を受けている。
- 六 それぞれの選択肢を本文と照らし合わせよう。アは232ページ1～3行目と合致する。イは「三歳くらいの」が誤り。ウは「幼いのにとても美しい子」が誤り。232ページ4行目と7行目の「うつくし」はかわいらしいという意味である。エは「籠に閉じ込めた」が誤り。体が小さいので籠に入れて育てたが、閉じ込めたわけではない。

解答

【門出】 語句・文法を理解しよう

- 一 ①にき ②いぬ ③あがた ④げゆ
  - ⑤たち ⑥はつかあまりふつか
  - ⑦かみしも ⑧わらは
  - 二 ①少しばかり ②大騒ぎするうちに
  - ③平穩無事に
  - ④送別の宴をしたり、餞別を贈ったりする
  - 三 ①a 伝聞 b 連体
  - ②a 断定 b 終止
  - 四 ①a キ b 終止 ②a ケ b 連体
  - ③a ア b 連体 ④a イ b 連体
  - ⑤a イ b 終止 ⑥a イ b 連体
- 文章の内容を読み取るう
- 一 前の国司(紀貫之)
  - 二 一日中、あれやこれやと用事をすませながら、
  - 三 ①腐る ②ふざける
  - 四 1 打消の助動詞「ず」の連体形「ざる」の撥音形「ざん」の「ん」の無表記「ぎ」と、伝聞の助動詞「なり」の終止形。
  - 2 見えざるを
  - 五 八木のやすのり
  - 六 (例) もうお別れなので関係ない(見送りに行かなくてもよい、など)。
  - 七 ①船(路)・馬 ②一(文字)・十(文字)

解説

【門出】 語句・文法を理解しよう

- 三 二つの助動詞「なり」の識別は、次のとおり。体言・副詞・活用語の連体形+「なり」↓断定 活用語の終止形(ラ変型には連体形)+「なり」 ↓伝聞推定
  - ここは、①はサ変動詞「す」の終止形に接続しているから伝聞推定、②はサ変動詞「す」の連体形「する」に接続しているから断定の助動詞である。
  - 四 ①主語は「女(である私)」も「であるから、一人称。「む」は一人称が主語のときは意志を表すことが多い。「とて」は文を受ける格助詞であるから、「む」は終止形。③この「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形である。完了の「ぬ」なら連用形につく。⑤文末にあって係り結びもないので、「ぬ」は終止形とわかる。なお、本文前行の「人々なむ」の「なむ」の結びは、接続助詞「て」に続いているために流れてしまっている。⑥「これぞ、……したる。」と「ぞ」の結びになっている。
- 文章の内容を読み取るう
- 一 「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。」(274・1)とあるように、作者紀貫之は書き手を女性に仮託し、この日記を物語的に書こうとしたのである。国司としての任期を終えて帰京する人物⇨自分のことを、「ある人」と

漢文入門

漢文の世界へ

漢文の構造と訓読の仕方

ノート P.18 ~ P.19

解答

基本的な用語の確認をしよう

漢文の基本構造と訓読の仕方を学ぼう

- 一 A ア B B オ C C エ D D イ
- E E
- 二 A カ B B オ C C ウ D D イ
- E ア F F エ G G ク H H キ
- ①2 1 4 3 ②6 1 5 3 2 4 7
- ③7 3 1 2 4 6 5 ④8 4 1 3 2 7 5 6
- 四 ①3 1 2 6 4 5。
- ②6 5 1 4 3 2 7。
- ③7 3 1 2 4 6 5。
- ④1 8 5 2 4 3 7 6。
- 五 ①ア・キ ②エ・ク ③ウ・カ ④イ・オ
- 六 ①他山の石、以て玉を攻むべし。
- ②過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。
- ③千里の行も、足下より始まる。
- 七 ①吾日三省吾身。
- ②未嘗敗北。
- ③引酒且飲之。
- ④温故而知新。

解説

基本的な用語の確認をしよう

漢文の基本構造と訓読の仕方を学ぼう

- 一 漢語の構造は、①「AがBする、AはBだ」という「主語・述語の関係」、②「AがBを修飾する」という「修飾・被修飾の関係」、③「AとBが同等の資格をもって並んでいる」という「並列の関係」(AとBが同種の場合もあるし、反対のものがある場合もある)、④「Aで、行為や現象を示し、Bで、その対象や場所・事物などを補う」という「補足の関係」、⑤「Aで、よしあし・可否などの認定をくだし、Bで、その内訳内容を述べる」という「認定の関係」の五種類が基本となっている。設問は、A「地が震える」ウ「雷が鳴る」、B「白い雲」オ「再び会う」、C「風・雨」ア「優れている・良い」(同種の語が並んでいる)、D「成す↑功を」イ「読む↑書を」、E「ない↑正しく」エ「できる↑視る」と、それぞれ解釈することができる。
- 二 返り点の優先順位は、①レ点②一・二点③上中下点である。レ点を読む前に一・二点や上中下点を読むことはできず、一・二点を読む前に上中下点を読むことはできない。返り点の優先順位を必ず守ることが大切である。

設定したのである。

- 二 主語は「年ごろよく比べつる人々」(274・6)。長年親しく交際してきた人々が、一日中、入れ替わり立ち替わりやってきては別れを惜しむさまをいった。
- 三 「いとあやしく」(275・2)は「たいそうおかしなことに」の意。塩分がきいて物が腐る(あざる)はずのない海辺でふざけ(あざれ)合っているのは、おかしいことだよ、という、言葉遊びしゃれ。
- 四 指示語の指す内容は直前から探すのが原則。ここは、主語「これ」(275・6)の述語が「馬のはなむけしたる」(275・7)であることをまず確かめる。そして前の文をたどると、「この人」(275・5)が、「これ」に置き換えられる。では、「この人」とは具体的には誰かと考えてさらに前の文をたどる。
- 五 「国人の心の常として、『今は。』とて見えざる」(275・8)と「心ある者は、恥ぢずになむ来ける」(275・9)が対比されていることに着目。普通は、国司が任期を終えたからといって、『今は。』と言って見送りに来ないと聞いているのに、「真心のある者は、気兼ねしないで来てくれる」のである。
- 六 ①「馬には乗らない船旅なのに、馬の鼻を向けている(錢別をする)ことだ」という言葉遊び。②(手では)「一」という文字さえ知らない者が、(足で)「十」という文字を書いている、という言葉遊び。

再読文字の読み方の法則としては、①返り点に

- 三・四 七点は先にレ点を読み、その後上点を読み、上点を読んだらすぐに下点を読む。七点は先にレ点を読み、その後一点を読み、一点を読んだらすぐに二点を読む。返り点は必ずしも一つだけ出てくるとは限らず、七点・七点のように組み合わさって出てくることもあるので、法則をしっかり理解しておくこと。
- 五 再読文字の読み方の法則としては、①返り点に関係なくまず副詞として読み、その後、返り点に従って、下から返って動詞・助動詞として読む。②書き下し文にする際は、初めに読むときは漢字で書き、次に読むときは平仮名で書く。③再読文字の送り仮名は初めに読むものは右に、あとで読むものは左に書く。再読文字の主なものとは次のとおり。
- 未(読み方↓いまダ) (セ)ず、意味↓まだ (シ)ない、将・且(読み方↓まさニ) (セント)す、意味↓これから(または「今にも」) (しよう)する。今にも (になろう)す (し)当(読み方↓まさニ) (ス)ベシ、意味↓当然 (す)べきだ。 (し)なければならぬ、(読み方↓まさニ) (ス)ベシ、意味↓べきだろ。きつと(だろ)う、須(読み方↓す)べからく (ス)ベシ、意味↓せひ (する)必要がある。かならず (し)なければならぬ、(読み方↓まさニ) (ス)ベシ、意味↓宜(読み方↓よるシク) (ス)ベシ、意味↓(する)の(が)よい、猶・由(読み方↓なホ) (スル)ガ(または「ノ」)ことシ(または「ノことシ」、意味↓ちようど)と同じようなものだ。あたかも(の)ようだ、盍(読み方↓なんゾ



〜(セ)ぎル、意味↓どうして〜(シ)ないのか)

六 漢文を書き下し文にする際、助詞・助動詞に相当するものは平仮名に直す法則を理解すること。平仮名に直す代表的な助詞・助動詞は次のとおり。助動詞に相当するものは、「不(打消の助動詞「ず」に相当する)」、「使(使役の助動詞「しむ」に相当する)」、「可(推量の助動詞「べし」に相当する)」、「也(断定の助動詞「なり」に相当する)」、「如(比況の助動詞「ごとし」に相当する)」、「之(助詞の「の」に相当する)」、「自(助詞の「より」に相当する)」、「与(助詞の「と」に相当する)」、「者(助詞の「は」に相当する)」、「耳(助詞の「のみ」に相当する)」など。なお、助動詞には「活用」があるため、「也(なり)」「は(なら)」「なり」に「なり」「なる」「なれ」「なれ」と変化させて書くこと。

①「他山之石」の「之」は助詞に相当するため、書き下し文にするときは「他山の」と平仮名に直す。「可」は助動詞に相当するため、書き下し文にするときは「べし」と平仮名に直す。「他山の石、以て玉を攻むべし」とは「他人の間違いや良くない言動でも、自分を磨くために役立てることが出来る」という意味。「よその山から出た粗末な石でも、自分の山の宝玉を磨くことに利用できる」というのが本来の意味。「良い言行を手本にする」という意味で使うのは誤り。文化庁が発表した平成16年度「国語に関する調査」では、本来の意味である「他人の誤った言行も自分の行いの

参考となる」で使う人が26・8パーセント、間違った意味「他人の良い言行は自分の行いの手本となる」で使う人が18・1パーセントという結果が出ている。

②「不<sup>レ</sup>及<sup>バ</sup>」の「不」は助動詞に相当するので、書き下し文にするときは「ざる」と平仮名に直す。「猶<sup>ホ</sup>」は再読文字なので、先に「なほ」と副詞として読み、その後返り点に従って、下から返って「ごとし」と助動詞として読む。「過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし」とは「何事でも度を超えて行きすぎたものは、不足していることと同じように良くない」を意味する。孔子が中庸の大切さを説いた「論語」がその出典。

③「千里之行」の「之」は助詞に相当するため「千里の行も」と平仮名に直す。「千里の行も、足下より始まる」とは、「どんな大きな事業も、手近なところから始め、着実に努力を重ねていけば必ず成功する。千里もの遠い旅も、足下の第一歩から始まる」を意味する。類義語としては「千里の行も一歩より始まる」「始めの一歩、末の千里」などがある。

七 書き下し文に従って白文に調点を付ける場合は、再読文字に注意すること。①熟語に返って読む場合には、「三省」のように「」を用いる。「吾日に吾が身を三省す」とは「不忠、不信、不習について、日に幾度となく我が身を省みる」を意味する。「論語」が出典。②「未」③「且」は再読文字なので、二度目に読むための返り点を付け忘れないようにすること。送り仮名がある場合は、再読文字の左下に付ける。またここでの「之」

## 史話 先従隗始

ノート P.20〜 P.21

### 解答

語句・句形を確認しよう

- 一 ①とも ②すす ③しめ ④つか
- ⑤し ⑥か ⑦いは ⑧あ
- 二 ①言葉 ②私(王侯の謙称) ③仕返しをする
- ④国政を一緒に行う ⑤(不名誉を)除き去る
- ⑥昔 ⑦一年 ⑧招く ⑨駆けつける
- 三 ①イ ②ウ ③ア
- 四 況んや隗よりも賢なる者、豈に千里を遠しとせんや。置き字…於

文章の内容を読み取る

- 一 昭王が賢者を招くため。
- 二 ウ
- 三 千金を以て涓人をして千里の馬を求めしむる者有り。
- 四 千里の馬を買って来いと云ったのに、死んだ馬の骨を五百金の大金で買って来たから。
- 五 エ
- 六 千里の馬…賢者(賢士)  
死んだ馬…郭隗(隗)
- 七 ①師として尊敬し、教えを受けること。  
②郭隗
- 八 (例)賢者を招くには、無能な自分を雇うことから始めると、もっと優秀な者が活躍の場を求めて集まってくるということ。

### 解説

語句・句形を確認しよう

- 一 ⑤「使<sup>ム</sup>」<sup>A</sup>「<sup>B</sup>」は使役の句形。「<sup>A</sup>に命じて<sup>B</sup>させる」と訳す。
- 二 本文の文脈に沿って意味を把握すること。
- 三 ①は抑揚。②は比較。③は反語。
- 四 「於」は置き字なので書き下し文にする場合は書かないこと。「哉」は助詞に相当するので書き下し文にするときは平仮名に直す。

文章の内容を読み取る

- 一 本文1行目に出てくる人を表す言葉は「燕人」と「昭王」。「燕人」は「日本人」のように「燕(の国)の人」と一般的な総称で用いられているので、実際に行動しているのは「昭王」だとわかる。
- 二 「可<sup>ナ</sup>者」は「ふさわしい人物」の意味でこの一文の中では「を」が送られていることから目的語に相当する。「先生がふさわしい人物を」と解釈できるので、それに相当する選択肢を選ぶこと。送り仮名も文章の意味を正確に理解するために必要なものなので注意すること。
- 三 まず一・二点、一・二・三点を読み、それから上・下点を読むこと。「使<sup>ム</sup>」は助動詞に相当するので、書き下し文にするときは平仮名に直すこと。五百金が大金であることを考えること。その大

は助詞としての扱いではなく「これ」という指示語の役割に相当するので、書き下し文に直す場合は、平仮名ではなく「之」と漢字の表記となる。「酒を引きて且に之を飲まん」とは「戦国策」の「蛇足」による。「蛇足」は「中国の楚の国で、数人の男が、蛇の絵を早く描き上げた者が酒を飲めるといふ競争をした。最初に描き上げた者は、余裕を見せて足を描き加えた。すると、次に描き終えた者が、蛇に足などないと言って酒を飲んでしまった」という故事から、「余計なもの。あっても役に立たない無駄なもの。よけいなものを付け足して台無しにしてしまうこと。」という意味。「こんな注意は蛇足だと思えますが、集合時間には遅れないように。」のように使う。④「而」は置き字のため、書き下し文にするときには書かない。置き字は次の四種類に分類されることがほとんどである。文中で接続助詞の働きをする「而」、文中で英語の前置詞のような働きをする「於・于・乎」、文末で断定・強調の意味を添える「矣・焉・也」、漢詩の句末で詩の調子を整える「兮」。「矣」は通常は読むことがないが「かな」と呼んで詠嘆の意味を表すこともある。置き字は漢文を訓読する場合に日本語にあてはめることができないう字であり、訓読する際には置き字は無視してしまい、書き下し文にするときにも書かないことを覚えておくこと。

金を使って買ってきたのは何の役にも立たない骨である。

五 「今、王必欲<sup>ム</sup>」は「今、<sup>A</sup>せば」という仮定の句形であり、「もし<sup>A</sup>ならば」の意味。本文の最後から2行目に「為<sup>レ</sup>隗<sup>ニ</sup>改<sup>メ</sup>築<sup>ク</sup>宮<sup>ヲ</sup>」とあることから「優遇した」ということがわかる。

六 「昭王」と「古之君」が対応していることを理解すること。「古之君」が欲しているのは「千里の馬」だが実際に手元にあるのは「死んだ馬の骨」。「昭王」が欲しているのは「賢者」だが実際に手元にあるのは誰か、と考えていけばよい。













七 「師事」は「著名な画家に師事する」などと現代でも用いられる語句なので覚えておくこと。

八 「死んだ馬」を買った例と同じように、私(郭隗)ですら登用されているのだから、自身を優秀だと思ふ人物は必ず重く用いられるはずだと思ふ、昭王の下へ集まってくるようになるということ。

## 精選 国語総合【改訂版】指導書・教材類のご案内

 = データまたは音声でのご提供です。  = 冊子でのご提供です。

### 指導書

セットで同梱	指導資料	
	発問例集	
	ワークシート (構成・内容理解、語句・漢字学習、古文品詞分解、漢文書き下し文、 古典口語訳)	
	基本テスト	
	評価問題	
	実力問題	
	補充教材	
	教科書原文	
	朗読 CD	
	漢文エディタ	
	学習課題ノート	
	教師用教科書	
本体価格(予価)	¥25,000	

※「発問例集」の内容は「指導資料」にも含まれています。

### 指導書別売品

教師用教科書	 ¥5,000
--------	---

※指導書セットの「教師用教科書」と内容は同じです



指導資料 PDF 版	 ¥5,000
------------	---

※指導書セットの「指導資料」の紙面を PDF ファイルにしたものです。

### 生徒用教材(採用品)

学習課題ノート	 ¥600
---------	---

### デジタルテキスト

指導者用デジタルテキスト	
学習者用デジタルテキスト	

※指導書・教材類は現在編集中のため、内容・仕様等については変更する場合があります。

※価格はいずれも本体価格(予価)です。

予価(本体600円+税)

## 三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14  
☎03-3230-9411(編集)・9412(営業)

### 大阪支社

〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3  
☎06-6341-2177

### 名古屋支社

〒460-0008 名古屋市中区栄3-25-43 瑞穂ビル 4F  
☎052-252-9211・9212

### 九州支社

〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1  
☎092-531-1531・1532

### 札幌営業所

〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ラスコム15ビル 3F  
☎011-616-8722

三省堂版準拠

精選  
国語総合  
改訂版

# 学習課題ノート

ご採用  
見本  
ダイジェスト  
版

年 組 番 氏名